

帯広市ばんえい競馬運営ビジョン

平成24年3月

帯 広 市

(平成26年3月一部見直し)

目 次

はじめに

1 全国の公営競技の現況

- (1) 競馬・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
- (2) 競輪、競艇、オートレース・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

2 ばんえい競馬の概況

- (1) 沿革・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
- (2) 施設概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
- (3) 運営体制・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
- (4) 開催状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
- (5) 農用馬の生産状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

3 ばんえい競馬の果たしている役割

- (1) 馬文化の伝承・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
- (2) 地域経済への貢献・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
- (3) 観光資源としての可能性・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
- (4) 農用馬生産への寄与・・・・・・・・・・・・・・・・ 8

4 ばんえい競馬運営の現状と課題

- (1) 勝馬投票券発売額、本場入場者数の推移・・・・・・・・ 9
- (2) 経営状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
- (3) これまでの運営改善等の主な取り組み・・・・・・・・ 10
- (4) 運営改善の成果と課題・・・・・・・・・・・・・・・・ 11

5 今後のばんえい競馬の展開方策

- (1) 基本的な考え方・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12
- (2) 具体的な取り組み・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12
- (3) 収支見通し・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15

はじめに

昭和28年に帯広市、旭川市、北見市、岩見沢市の4市がそれぞれ主催する市営競馬として発足したばんえい競馬は、平成元年には開催4市を構成団体とする北海道市営競馬組合へと運営体制を変更するなど経営の合理化を図りながら、その売上により地方財政や地域経済に大きく貢献するとともに、北海道ならではの公営競技としても多くの道民に親しまれてきました。

しかしながら、長引く景気の低迷やレジャーの多様化等により、平成3年度をピークに勝馬投票券発売額が急速に減少し、大幅な累積赤字が計上されるなど経営の改善が見込まれないことから、平成18年度をもって4市による競馬開催は廃止されることとなりました。

帯広市としても、一旦は存続困難と判断したものの、全国のファンや競馬関係者、市民からばんえい競馬存続の強い要請を受け、また、競馬関係者等の協力や民間企業の支援が得られることとなったことから、平成19年度から帯広市単独で「ばんえい十勝」として開催することとなり、今日に至っています。

その後、5ヵ年にわたり多くのファンや競馬関係者などの協力をいただきながら、様々な経営の改善に取り組むとともに、観光をはじめとして地域経済へも大きな貢献をしてまいりましたが、その一方で勝馬投票券発売額は毎年減少を続けており、馬主や競馬関係者への報償費や競馬事務を受託する民間企業への委託料も減少を続けている現状にあります。

こうした厳しい状況を受け、ばんえい競馬の継続開催に向けたあり方について幅広い観点から検討するため、昨年5月に公募による一般市民や学識経験者、競馬関係者らによる「帯広市ばんえい競馬検討委員会」を設置し、6回にわたる検討を重ね、昨年11月に報告書が提出されたところです。

この「帯広市ばんえい競馬運営ビジョン」は、検討委員会から提出された様々な提言を踏まえ、ばんえい競馬の安定的な継続開催に向けて全ての関係者が認識を一つにして取り組んでいくために、中期的な経営改善の展開方向や収支見通しなどを示すものです。

ばんえい競馬は、北海道開拓の歴史を今日に伝える貴重な文化遺産であり、かつ、地域振興を担う重要な財産でもあります。私は、これまで多くのファンに感動と勇気を与えてくれた、世界で唯一帯広にしかないばんえい競馬を今後とも存続させていくという強い決意を持って、地元である帯広・十勝はもとより、北海道さらには全国の皆さんと手を携えて努力してまいります。

平成24年3月

帯広市長 米沢 則寿

1 全国の公営競技の現況

公営競技は、戦後における復興財源など、収益金を主として地域の公共目的達成のために使用することを目的として開催されており、各公営競技の根拠法令により、実施場所・開催回数・開催方法など事業の実施に対して厳格な制限が加えられています。

現在、日本で開催されている公営競技は以下の4つです。

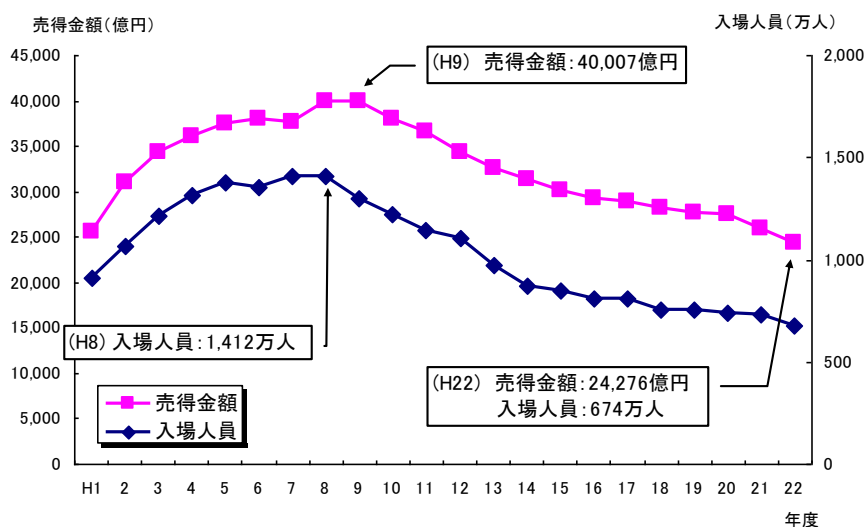
(1) 競馬

① 中央競馬

中央競馬は日本中央競馬会（以下JRA）が主催しており、全国に10箇所の競馬場と42箇所の場外馬券発売所を展開しています。

勝馬投票券（馬券）の売上は平成9年度の約4兆円をピークに、平成22年度は2兆4,276億円とピーク時の約61%にまで減少しており、13年連続で減少しています。

中央競馬 入場人員及び売得金額の推移グラフ



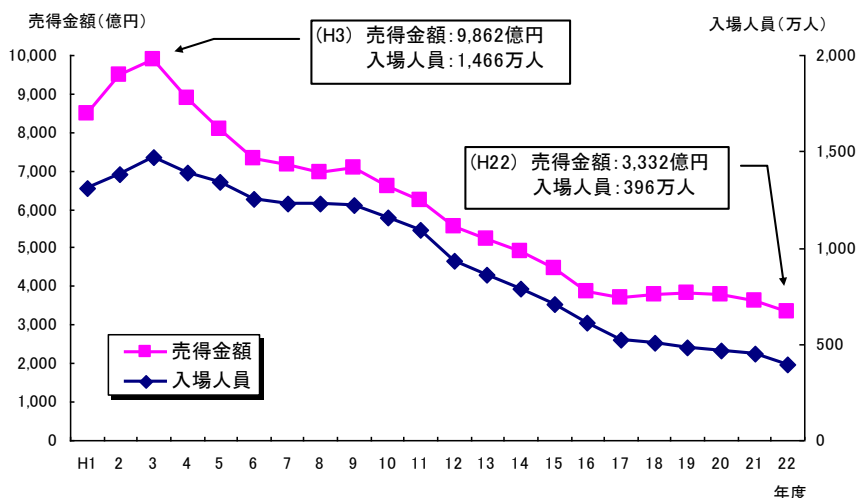
(資料: 地方競馬全国協会)

② 地方競馬

地方競馬は、都道府県または総務大臣により指定を受けた市町村、もしくはこれらの地方公共団体により構成される一部事務組合により実施されており、平成23年4月現在、地方競馬を開催している主催者は、全国で2道県、3市、11一部事務組合の合計16主催者となっています。

勝馬投票券の売上げは平成3年度の9,862億円をピークに平成22年度では3,332億円とピーク時の約34%にまで減少しており、JRAと同様に年々減少しています。

地方競馬 入場人員及び売得金額の推移グラフ



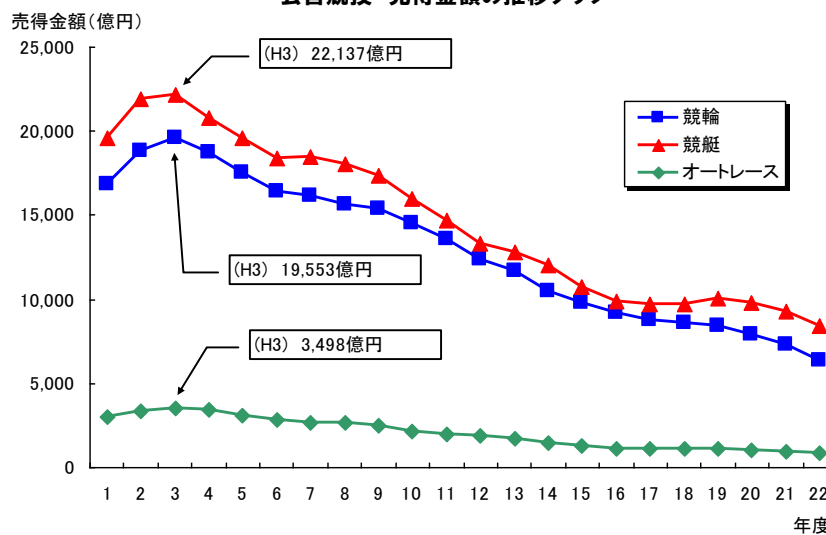
(資料: 地方競馬全国協会)

(2) 競輪、競艇、オートレース

平成23年4月現在、全国に競輪場は45場、競艇は24場、オートレース場は6場が存在しています。

いずれも平成3年度の売上をピークとして、以降、競馬と同様に売上の減少が続いています。平成22年度の売上はピーク時に対し、競艇が38%、競輪が32%、オートレースが25%となっています。

公営競技 売得金額の推移グラフ



2 ばんえい競馬の概況

(1) 沿革

ばんえい競馬は、当初、明治時代の北海道開拓において交通、運搬、農作業などに活躍した馬の価値や力を試すための競走として始まり、その後、農村地域を中心に娯楽として開催された「お祭りばんば」により定着しました。現在でも十勝管内をはじめ、道内各地で地域行事として開催されています。

公営のばんえい競馬は昭和24年に北海道の主催により開催されたのが始まりで、昭和28年には、競馬法の改正を受けて、旭川市、帯広市、北見市、岩見沢市の4市がそれぞれ主催する市営競馬がスタートしました。

その後、開催日程の競合や賞金額の格差など4市独自開催による弊害が生じてきたことから、経営の合理化などを図るため、平成元年に開催4市を構成団体とする一部事務組合（北海道市営競馬組合）を設立し、平成3年度には約323億円と過去最高の勝馬投票券発売額を記録しました。

しかし、この年を境にバブル経済崩壊などの影響を受け、勝馬投票券発売額が急激に減少し、収益率も大幅に悪化したことから、経営再建に向けて検討が行われましたが、平成18年度をもって4市による競馬運営は廃止し、一部事務組合の解散と補償を含めた全債務について清算することが決定されました。

平成19年度からは、ばんえい競馬の存続に向けた民間企業からの具体的な提案を受けたことや競馬関係者等からの支援が期待されたことから、帯広市の1市単独によるばんえい競馬の開催を決定し、「ばんえい十勝」として再スタートして今日に至っています。

(2) 施設概要

ばんえい十勝の本場である帯広競馬場は、土地及び建物のほとんどを十勝農業協同組合連合会から帯広市が賃借しています。総面積は約40万㎡、馬場200mダート、スタンド収容人数4,600人、有料席84席となっています。

JR帯広駅から車で約7分と中心市街地からほど近く、無料駐車場は1,100台の収容が可能となっています。

場内に設置されている厩舎は32棟、732馬房で、うち在厩馬は平成22年度の平均で506頭となっています。

また、場外発売所は道内各地に7箇所（旭川市、岩見沢市、北見市、釧路市、名寄市、苫小牧市、網走市）設置しています。

平成22年8月には、ばんえい競馬との相乗効果による集客力の向上を図るため、帯広競馬場内に観光交流拠点施設「とちあむら」がオープンし、市内でもっとも人気のある観光スポットとなっています。

(3) 運営体制（平成23年4月1日現在）

帯広競馬場における競馬関係者は、馬主386名、調教師33名、騎手31名、厩務員126名となっています。

競馬の開催に関する事務を処理する開催執務委員等については、正職員5名、定形嘱託職員4名、非常勤嘱託職員2名、事務補助職員1名の計12名体制となっています。

なお、投票や広報など競馬開催に関する大半の業務をオッズパーク・ばんえい・マネジメント㈱（以下OPBM）に包括的に委託しており、OPBMの社内体制は社員37名、臨時従事員等125名となっています。

この他、警備、清掃、映像管理、放送関係、獣医師、装蹄師など38名が勤務しています。

(4) 開催状況

ばんえい十勝は、土・日・月曜日を中心として、平成23年度は年間154日の開催を予定しています。

また、ばんえい十勝の非開催日には南関東競馬（大井、川崎、船橋、浦和）、ホッカイドウ競馬など他場で開催されている地方競馬の勝馬投票券を発売しており、平成23年度は247日間の発売を予定しています。

(5) 農用馬の生産状況

農用馬の生産は、ばんえい競馬及び食肉用としての需要に支えられており、主な生産地は北海道が全体の約9割を占めているほか、東北、九州等で生産されています。

近年、ばんえい競馬の勝馬投票券売り上げの低迷に伴う報償費の減額により馬主の競走馬購買力が低下していることや、食肉用としての安価な肥育素馬の輸入頭数増大などにより、農用馬の生産意欲が低下しており、平成7年から平成22年の15年間で農用馬の生産頭数は約4分の1に減少しています。

■地域別生産頭数の推移

(単位:頭)

地 域	平成7年	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
北海道	5,692 84.2%	5,413 84.8%	5,773 87.4%	4,478 85.5%	4,327 86.6%	4,079 86.8%	3,546 86.0%	3,458 88.5%	3,341 89.6%	2,821 89.2%	2,395 90.2%	2,085 90.3%	1,930 90.1%	1,672 88.5%	1,680 89.4%	1,501 87.4%
青森県	133 2.0%	72 1.1%	90 1.4%	85 1.6%	79 1.6%	60 1.3%	69 1.7%	61 1.6%	60 1.6%	43 1.4%	36 1.4%	31 1.3%	31 1.4%	32 1.7%	12 0.6%	25 1.5%
岩手県	299 4.4%	287 4.5%	222 3.4%	208 4.0%	202 4.0%	184 3.9%	167 4.1%	120 3.1%	99 2.7%	88 2.8%	81 3.1%	65 2.8%	60 2.8%	54 2.9%	44 2.3%	54 3.1%
島根県	58 0.9%	66 1.0%	82 1.2%	66 1.3%	87 1.7%	71 1.5%	72 1.7%	42 1.1%	44 1.2%	49 1.5%	35 1.3%	31 1.3%	37 1.7%	27 1.4%	28 1.5%	20 1.2%
熊本県	202 3.0%	204 3.2%	160 2.4%	135 2.6%	99 2.0%	103 2.2%	113 2.7%	110 2.8%	97 2.6%	98 3.1%	70 2.6%	64 2.8%	60 2.8%	85 4.5%	87 4.6%	97 5.6%
宮崎県	218 3.2%	189 3.0%	166 2.5%	164 3.1%	136 2.7%	124 2.6%	107 2.6%	78 2.0%	61 1.6%	24 0.8%	26 1.0%	26 1.1%	20 0.9%	14 0.7%	21 1.1%	12 0.7%
その他	156 2.3%	152 2.4%	113 1.7%	104 2.0%	68 1.4%	80 1.7%	47 1.1%	37 0.9%	28 0.8%	40 1.3%	12 0.5%	7 0.3%	5 0.2%	5 0.3%	8 0.4%	8 0.5%
計	6,758 100.0%	6,383 100.0%	6,606 100.0%	5,240 100.0%	4,998 100.0%	4,701 100.0%	4,121 100.0%	3,906 100.0%	3,730 100.0%	3,163 100.0%	2,655 100.0%	2,309 100.0%	2,143 100.0%	1,889 100.0%	1,880 100.0%	1,717 100.0%

(資料:(社)日本馬事協会調べ)

3 ばんえい競馬の果たしている役割

公営競技としての競馬は、「その行う競馬の収益をもって、畜産の振興、社会福祉の増進、医療の普及、教育文化の発展、スポーツの振興及び災害の復旧のための施策を行うのに必要な経費の財源に充てるよう努める」（競馬法第23条の9）こととされており、ばんえい競馬においても、昭和28年に帯広市、旭川市、北見市、岩見沢市の4市による市営競馬が発足して以来、各市の財政や地域経済に大きく貢献してきましたが、長引く景気の低迷やレジャーの多様化などにより、厳しい経営状況が続いています。

しかし、ばんえい競馬が直接的にもたらす収益のほか、地域経済への貢献や観光資源、畜産振興としての側面など、ばんえい競馬は地域振興に大きな役割を果たしています。

(1) 馬文化の伝承

北海道における馬の歴史は明治時代の開拓の歴史に遡り、十勝では依田勉三を中心とする晩成社が明治19年にプラウによる農耕を開始して、現在の十勝農業の発展の基礎を築くなど、農用馬は北海道開拓の原動力として重要な役割を果たしてきました。

ばんえい競馬は、開拓当時の厳しい農耕の合間に馬の力を試したお祭りばん馬が発展したものであり、平成16年には北海道の開拓の歴史と馬文化を伝える「北海道遺産」として選定されています。

(2) 地域経済への貢献

ばんえい競馬の開催による帯広・十勝への経済波及効果は、平成22年度においては、競馬開催に要する施設賃借料や業務委託料をはじめ、調教師・騎手・厩務員・開催関係職員の人件費などの直接的経費のほか、ばん馬の生産に関わる経費、さらには、ばんえい競馬に来場した観光客が支出する交通費、宿泊費、飲食費などの関連経費も含めると、全体で約57億円と試算されています。

また、ばんえい十勝の平成22年度における勝馬投票券発売額は約105億円となっており、帯広市内においても年間100億円を売り上げる企業は少ないことから、ばんえい競馬が地域経済に与える効果は極めて大きいことがうかがえます。

(3) 観光資源としての可能性

ばんえい競馬は、体重1トンを超えるばん馬が鉄そりを引き、200mの直線コースで力とスピードを競う、世界で唯一の競馬です。その発祥は北海道開拓時代の人と馬の歴史に遡り、道民全体の宝である北海道遺産として今日に受け継がれてい

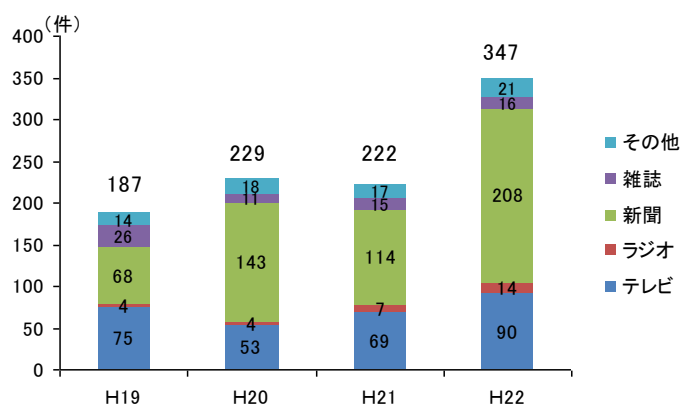
ます。

また、ばんえい競馬をテーマとした映画やテレビ番組の作成、雑誌などへの掲載が行なわれているほか、ばん馬の「リッキー号」「ミルキー号」が帯広市の嘱託職員として全国各地の観光イベントに参加するなど、ばんえい競馬と併せて開催地である帯広・十勝の情報を道内はもとより広く全国に発信しています。

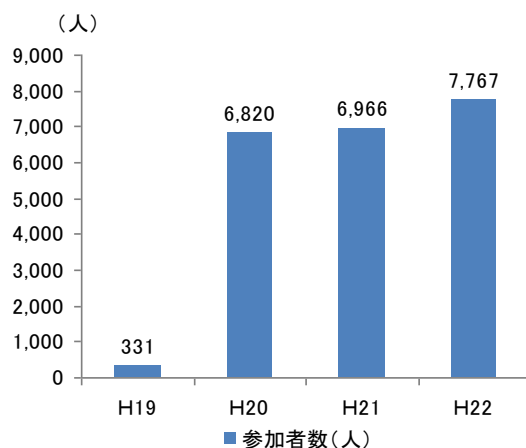
競馬場内では施設を活用してバックヤードツアーや朝調教ツアー、馬のふれあい広場などの体験型メニューが提供されており、多くの観光客が来場しているほか、平成22年8月には競馬場敷地内に観光交流拠点施設「とかちむら」がオープンし、ばんえい競馬との相乗効果によって更に多くの地域住民や観光客が訪れ、市内で最も集客力のある観光スポットになっています。

こうしたことから、ばんえい競馬は単に公営競技としてだけでなく、帯広・十勝を国内外に発信する貴重な観光資源としての役割を担っています。

■取材件数の推移



■バックヤードツアー参加者数の推移



(4) 農用馬生産への寄与

農用馬は、かつては農業等における主要な労働力でしたが、農作業の機械化が進んだ現在では、ばんえい競馬用及び食肉用としての需要に支えられています。

しかしながら、農用馬の主要な仕向け先であるばんえい競馬の勝馬投票券発売額の低迷に加え、生産農家の高齢化の進行や馬肉の市場価格の低迷などにより、農用馬の生産頭数は年々減少しており、こうした状況が続いた場合には、ばんえい競馬の競走馬の安定的な確保についても危惧される状況となっています。

今後、ばんえい競馬を継続的に開催していくためには、競走馬の安定的な確保が不可欠であり、生産者が安心して意欲を持って農用馬を生産できるよう、ばんえい競馬の安定的な運営を図るとともに、国や北海道、地方競馬全国協会などの関係団体に対しても引き続き支援を要請し、農用馬の生産振興を図る必要があります。

4 ばんえい競馬運営の現状と課題

(1) 勝馬投票券発売額、本場入場者数の推移

帯広市単独開催となった平成19年度の発売額は、約129億3千万円でしたが、以後減少傾向が続いており、平成22年度は、約105億7千万円となり、平成19年度と比較すると約18%、23億6千万円の減少となっています。

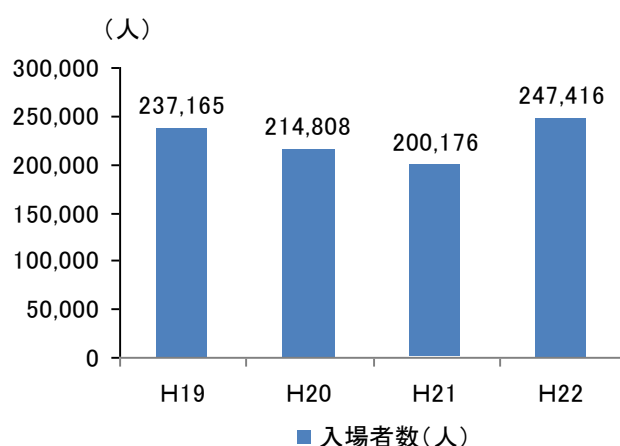
内訳をみると、インターネット等の電話投票が約39%、8億7千万円増加しているのに対し、本場の発売額は約23%、7億8千万円の減少、直営場外発売所の発売額は約34%、19億円の減少となっています。

また、本場入場者数は、平成19年度の約23万7千人から減少が続いていましたが、平成22年度は、観光交流拠点施設「とちまちむら」のオープン等により、前年度対比約4万7千人増、平成19年度と対比しても約1万人増の24万7,416人となりました。

■勝馬投票券発売額の推移

年 度	開催日数	発売金額 (円)	前年比	1日平均発売額 (円)	対前年比
平成19年度	150日	12,933,971,600	—	86,226,477	—
平成20年度	150日	11,555,358,700	89.3%	77,035,725	89.3%
平成21年度	150日	10,736,137,400	92.9%	71,574,249	92.9%
平成22年度	151日	10,568,312,900	98.4%	69,988,827	97.8%

■ばんえい十勝 本場入場者数の推移



(2) 経営状況

ばんえい競馬は、平成19年度の帯広市単独開催を決定した際、馬主や調教師・騎手・厩務員などに競走馬の着順に応じて支給する報償費の変動制を導入したほか、

民間会社への包括的な競馬事務委託を行なうなど、競馬開催に係るコストの削減を実施しました。

これらは、勝馬投票券発売収入などの収入額の増減に応じて、報償費や委託料が変動する仕組みであることから、勝馬投票券発売額の減少に伴って報償費や委託料が減少するとともに、競馬開催によって生じた損失や余剰は受託会社が吸収することとなっており、帯広市ばんえい競馬会計全体としては常に収支均衡が保たれることになっています。

この仕組みにより、ばんえい競馬会計が赤字となるリスクは回避されますが、一方では、競馬運営のための再投資などの財源が確保されず、また、勝馬投票券発売額などの低迷が、馬主の競走馬購買意欲の低下や受託会社の経営を圧迫する要因となっています。

■収支の状況

年 度	歳入総額(円)	歳出総額(円)	単年度収支(円)
平成 19 年度	13,488,546,122	13,488,182,205	363,917
平成 20 年度	11,831,595,428	11,830,890,284	705,144
平成 21 年度	11,010,946,987	11,010,021,117	925,870
平成 22 年度	10,812,764,315	10,812,185,536	575,779

(3) これまでの運営改善等の主な取り組み

帯広市による単独開催を開始した平成19年度以降、以下のような様々な運営改善の取り組みを行なってきました。

① 発売額の向上

- ばんえい競馬初となるナイトー競馬の開催 (H19.6)
- 五重勝式馬券の発売 (H22.1)
- 網走市に場外馬券発売所を新規設置 (H22.9)
- 開催日を例年比3日間増加 (H23.4)
- 三連勝賭式馬券の導入 (H23.8)

② ファンサービスの向上

- 競馬場スタンドの大規模改修 (H19.4)
- バックヤードツアーの実施 (H19.4)
- 帯広競馬場内に「とちちむら」オープン (H22.8)
- 一部有料化によるスカパーでの全レース実況生中継の開始 (H23.4)

- スポーツ紙での馬柱掲載拡充 (H23. 4)

③ 経費の削減

- 帯広競馬場の馬券発売窓口の自動発売機化 (H20. 4)
- 旭川場外発売所の移転 (H21. 4)
- 北見場外発売所の移転 (H21. 7)

④ 競走馬の確保

- 優良農用馬資源確保緊急特別対策事業（生産者賞）の実施 (H19. 4～)
- 新馬導入推進助成事業の実施 (H23. 4)

(4) 運営改善の成果と課題

様々なファンサービス向上策や積極的な広報活動に加え、映画やテレビドラマなどをはじめとする各種メディアでも数多く取り上げられたことから、ばんえい競馬は全国的に注目度を増してきています。

入場人員も、「とちまちむら」オープンを機に増加し、また、旅行会社の団体ツアーなどの観光客や北海道内外の修学旅行生が多数帯広競馬場を訪れるなど、地域の重要な観光拠点として定着してきています。

一方、発売額については、増加に向けた様々な取り組みを展開してきたにもかかわらず減少傾向が続いており、インターネットなどの電話投票は増加しているものの、本場、直営場外における発売額が低迷しているため、収益性も低下している現状にあります。

今後、本場入場者数の増加を馬券購入につなげていくための方策など、勝馬投票券発売額の増加等により収入の確保を図るとともに、業務内容の徹底した見直しによるコスト削減を行い、収支の改善によるばんえい競馬の安定的な運営を目指す必要があります。

また、競馬事業を継続して開催していくためには、何にも増して競走馬の安定的な確保が不可欠であり、関係機関と連携した取り組みを進めていく必要があります。

さらに、ばんえい競馬を地域の貴重な観光資源として十分に活用するとともに、より多くの市民に様々な機会を通してばんえい競馬への理解を深めていただき、地域全体でばんえい競馬を支えて地域振興へとつなげていくことが大切です。

5 今後のばんえい競馬の展開方策

(1) 基本的な考え方

北海道の開拓の歴史を伝える文化であり、地域の貴重な財産でもあるばんえい競馬を今後とも安定的に運営していくためには、多くの市民理解を得ながら、主催者である帯広市はもとより、競馬関係者が一丸となって様々な収入増加策やコスト削減策などに取り組み、馬主や生産者などが一定の将来見通しに基づいてばんえい競馬に安心して関わる環境をつくる必要があります。

そのため、これまでの包括的な事務委託を見直し、帯広市が競馬主催者として経営責任を担う運営体制を構築します。

また、世界で唯一帯広競馬場で開催されているばんえい競馬は、今や帯広・十勝の重要な観光資源ともなっており、観光客の誘致によって地域振興を図ると同時に、競馬場への来場者の増加を経営の改善へとつなげていくことが大切です。

こうした状況を踏まえ、今後とも収支均衡以上の運営によって継続的にばんえい競馬を開催するため、収入の増加・確保や徹底したコスト削減等の具体的な方策と併せて収支見通しを示すこととします。

(2) 具体的な取り組み

① 収入の増加・確保策

- 3連勝式勝馬投票券の通年発売により、売上の増加を図ります。
- ホッカイドウ競馬、南関東競馬など、他主催者との連携を強化し、相互発売の拡充による他場での発売日数の増加及び業務協力費の増収を図ります。
- ナイター開催日数の増加により、全国の競馬ファンへの浸透を図り、インターネット投票を中心に売上増加につなげます。
- 帯広競馬場・直営場外発売所における中央競馬の勝馬投票券の発売に向けた取り組みを進めます。
- 新たな直営場外発売所の開設に向けた取り組みを進めます。
- 7重勝式勝馬投票券を導入します。
- 観光客や初心者向けに、簡易な形態にした情報紙（イージーフォーム）を発行します。
- 経済団体等の理解と協力を得ながら、企業協賛レースの参加について企業に積極的に働きかけを行います。
- 従来から帯広競馬場で実施されている各種イベント等について、各主催者の協力を得て、勝馬投票券の売上増加につながる仕組みづくりを行います。
- バックヤードツアーの参加者に勝馬投票券を購入してもらう仕組みづくりを行います。

- 競馬場スタンドに、新たに有料席を設けることを検討します。
- 中央競馬電話投票システムによるばんえい競馬発売に向けて要請を行います。
- 中央競馬勝馬投票券の発売体制を強化し、委託料率の見直しについて協議します。
- 新たな勝馬投票券購入者を確保するため、電話投票業務委託会社等と連携した積極的な販売戦略を展開します。

② 徹底したコスト削減策

- 競馬事務委託の業務内容を大幅に見直して経費を縮減するとともに、受託業務に関する決算内容の概要を開示するなど透明性を高めます。
- 水道、電気料金及びゴミ処理費用の節減に努めるとともに、一部受益者負担の導入を実施します。
- 帯広競馬場・直営場外発売所の発売体制、投票システムの保守体制などの見直しにより、勝馬投票券の発売コスト削減を図ります。
- 帯広競馬場警備体制や清掃業務内容の見直しなどにより、委託料の削減を図ります。
- 他の地方競馬主催者ととも、勝馬投票券のインターネット発売会社に対して手数料率の見直しを求めます。
- 馬場整備や投票系端末機の整備などにおいて、各種補助・助成事業を活用します。
- 広告宣伝・広報業務について、各種メディアの取材に積極的に協力するとともに、より宣伝効果の高い手法に見直しを行い、コスト削減を図ります。
- 包括的事務委託業務のうち一部を帯広市が、直接実施、契約発注することにより、消費税増税の影響を抑制します。

③ 農用馬の生産振興及び競走馬確保策

- 地方競馬全国協会等の支援を受け、生産者対策及び新馬導入の推進を図ります。
- 農用馬は道内一円で生産されていることから、農用馬の生産振興に対する北海道の支援を求めます。
- 馬主等への報償費を従来の比率変動制から一定期間ごとの固定制へと見直し、競走馬の確保を図ります。

④ 観光資源としての活用策

- 観光関係団体との連携により、ばんえい競馬を組み込んだツアーの造成や中学・高校の修学旅行の誘致を図ります。

- 競馬が開催されていない日でも、帯広競馬場を訪れた市民や観光客が馬とふれあえる機会を増やします。
- 競馬関係者の協力を得て、競馬の非開催日に「模擬レース」を実施し、観光資源としてのばんえい競馬の価値を高めます。
- 首都圏や道内での観光PRイベント等にリッキー号・ミルキー号の嘱託馬を派遣し、十勝の観光情報とともにばん馬やばんえい競馬の魅力を伝えます。
- 観光客のニーズに応えるため、バックヤードツアーや朝調教ツアーの拡充を図ります。
- ボランティア等の協力を得ながら、ふれあい動物園の充実を図ります。
- 観光交流拠点施設「とちまちむら」との連携を強化し、帯広競馬場を、競馬ファンだけでなく、市民や観光客にも楽しめる施設となるよう取り組みます。
- テレビ、旅行関係雑誌、新聞広告などを活用した広報活動を展開し、観光客誘致を進めます。
- 初心者向けガイドブックや外国人向けガイドブックを作成し、来場者に対するサービスの向上に努めます。
- 各関係団体の協力を得て各種イベント等を開催し、帯広競馬場を市民や観光客が楽しめる施設となるよう取り組みます。

⑤ 市民理解の醸成

- 地域の行事や学校・福祉施設等への嘱託馬の派遣を通して、市民が「ばん馬」とふれあえる機会を増やし、ばん馬やばんえい競馬への理解を深めてもらえるよう努めます。
- 十勝管内の町内会や農業関係をはじめとする各種団体などが実施する行事や施設見学ツアーなどのコースにばんえい競馬を組み入れてもらうよう働きかけ、理解を深めてもらえるよう努めます。
- 広報紙等への掲載によりばん馬やばんえい競馬の歴史などに対する市民理解の浸透を図るとともに、クーポン券などにより来場のきっかけをつくり、ばん馬にふれあえる機会を増やすよう努めます。
- 競馬関係者の協力を得て、競馬の非開催日でも競馬場で馬文化を学ぶことができる機会を増やすなど、帯広競馬場がいつでも馬にふれあえる場として市民に身近な存在となるよう努めます。

(3) 収支見通し

上記の取り組みを行なうことにより、今後3ヵ年のばんえい競馬会計の収支見通しを次のとおり想定し、収支均衡以上の安定した運営を目指します。

■ばんえい競馬会計の今後の収支見通し

(単位:百万円)

区 分	平成26年度	平成27年度	平成28年度	備 考
収 入	11,383	11,550	11,429	
勝馬投票券発売収入	10,838	10,868	10,697	新設場外1箇所
業務協力費	491	639	689	南関東、中央競馬発売額増
その他	54	43	43	
支 出	11,383	11,539	11,427	
法定等経費	8,055	8,077	7,950	払戻金、地全協等負担金
業務協力費	900	931	943	電話投票発売額増
開催経費	2,428	2,531	2,534	
収 支	0	11	2	

※1 払戻金については、平成26年度から一部弾力運用することで試算

※2 消費税については、平成26年度以降8%で試算